

Peer review 活動によるレポートライティングスキルの向上

白石藍子¹ 鈴木宏昭² 小田光宏² 杉谷祐美子² 長田尚子¹

(1:青山学院大学大学院文学研究科, 2:青山学院大学文学部)

はじめに

「他者を説得する文章を書ける」というスキルは、大学生にとっても社会人にとっても重要なスキルである。しかし、このスキルは一般に高校までの勉強では重視されておらず、ゆえに大学入学後早い段階で習得できることが望ましい。そこで、「他者を説得する文章を書ける」というスキルを向上させるために我々が採用したのが、peer review 活動である。

他者との相互作用を通じた学習は、「他者から学ぶ力」の獲得や、リフレクションのための重要な手段であり、大学レベルの授業においても peer review 活動が有益であることは、鈴木ら(2006)の研究でも示されている。本研究では特に、レポートライティング授業において peer review 活動、すなわち互いのレポートにコメントし合う活動を取り入れることが、学生のレポートライティングスキルを向上させるか否かを、活動前後のレポートを Toulmin(1958)の議論モデルにしたがって比較することにより明らかにした。

本研究の対象

「駅から大学までの一番良い道について」書くという課題で peer review 活動を行なった。この課題は、学生にとって領域の前提となる知識がいない身近なテーマである一方、「良い道」の定義が曖昧であるため、どの道が良い道か単純に主張すること以外に、「良い」という判断基準を明確にすることと、その基準の妥当性(基準根拠)を述べる必要がある(鈴木ほか, 印刷中)。

本研究では、教育学科 1 年次の演習クラス(対象学生数は 20 名、1 グループは 5~6 名で構成)を対象とし、複数人のグループ単位で peer review を行なった。レポートの作成は次回授業までの課題とし、peer review 活動は 90 分の授業時間内に、1 人あたり 5~6 人のレポートに対して、指定された用紙にコメントするという形で活動を行なっている。なお、この段階では学生に Toulmin モデルおよびレポートの評価基準については教えていない。

分析枠組み

Toulmin モデル(Toulmin, 1958)をもとに構成した、レポートに含まれるべき 6 要素(主張、データ、基準、基準根拠、反証・限定、比較)を評価基準とし、1 名の教員と 1 名の大学院生が採点した。それぞれ 12 点満点(2 名の合計は 24 点)とし、1 回目と 2 回目のレポートの点数の伸びを確認した。2 名の採点者間の一致率は 1 回目のレポート(0.802)、2 回目のレポート(0.859)と高かったため、単純に 2 者の合計点を評価基準に採用した。

結果と考察

peer review 活動前後のレポートを比較したところ、低得点群(0~8 点)の学生は明らかに減少し、また高得点群(19 点以上)の学生も明らかに増加した(図 1)。さらに、評価項目

ごとの平均点についても、全ての項目で、1回目に比較して2回目の方が高くなっており、peer review 活動が学生のレポートに促進的な影響を与えたことが分かる。

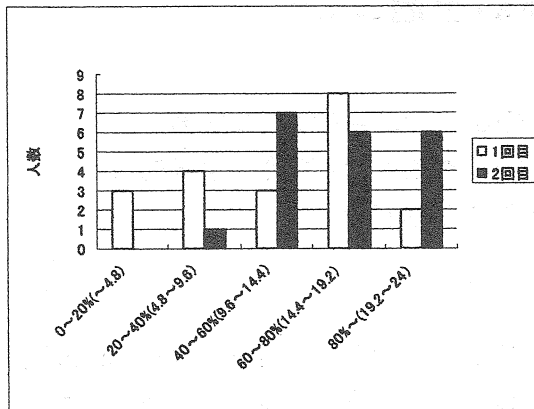


図 1 得点分布

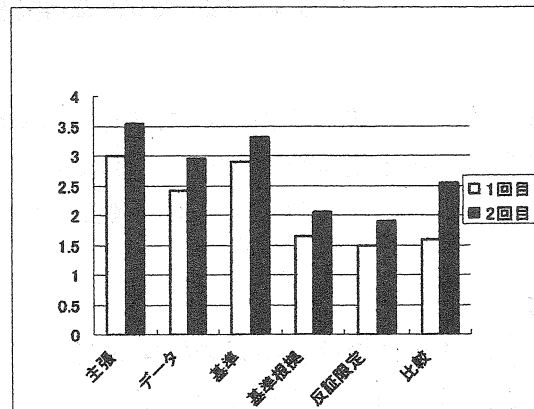


図 2 項目ごとの平均点

しかし、1回目の点数が低かった基準根拠・反証限定・比較のなかで、比較は、高い伸び(0.95ポイント)を示しているが、基準根拠と反証限定は、それぞれ0.4ポイントずつの上昇となっている。これは、相互コメントの中で、比較に関するコメントは全コメントの8%を占めたのに対して、基準根拠・反証限定に関しては2%のみにとどまったこと、また相互コメント後に学生に書かせたレポート改善プランにおいても、比較に関する改善プランは15%であったのに対して、基準根拠・反証限定に関してはそれぞれ1%のみにとどまったことが原因と言える。

このように学生同士で行なう peer review 活動は、指摘すべきポイントを見落とししてしまう恐れがあるという弱点がある一方、指摘を受けてない評価項目について2点以上の上昇があった学生も4名存在した。これは、明示的に指摘を受けていなくても、他者の良いレポート、悪いレポートそれぞれを読むことにより、知らないうちに自らの失敗部分に気づくことができるという利点を示していると言える。

まとめと今後の課題

今回の結果から、peer review 活動を取り入れることが、学生のレポートライティングスキルの向上に良い影響を与えることが分かった。しかし、同じテーマで2回レポートを書いているため、書くことに対する反復練習が今回の結果を生んだ可能性は否定できない。今後の研究では、セルフレビュー、すなわち他者による批評を受けてレポートを書き直すのではなく、レポートを書いた本人が自らのレポートを読み直し書き直すことと比較して、効果の差がどれほどかを調査する予定である。

参考文献

Toulmin, S.E. (1958) *The Uses of Argument*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

鈴木真理子・永田智子・西森年寿 (2006) 中規模授業における Web 環境を利用した peer review 活動. 京都大学高等教育研究, 第 12 号, p73~84

鈴木宏昭・長田尚子・館野泰一・小田光宏・杉谷祐美子(印刷中) Blog を用いた協調学習におけるレポートライティングスキルの習得. 京都大学高等教育研究, 第 13 号